

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：33704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02513

研究課題名(和文) アジア太平洋地域における日本侵略の記憶とアジア系アメリカ文学

研究課題名(英文) Memories of Japanese Occupation of Asia and Pacific Regions and Asian American Literature

研究代表者

河原崎 やす子 (KAWARASAKI, YASUKO)

岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：80341808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、太平洋戦争時の日本の侵略統治に関するアジア系アメリカ文学の表象を歴史記憶の観点から分析考察することを目的とした。これは被害国側の歴史記憶を示すものでもあり、アジア人作家も研究対象含めてジャンルの作品系譜を作成し考察した。作品の多くが1990年代以降発表されたことはアジア諸国の安定や人権観念の定着などを背景としている。作品群が共通して示すのは、日本侵略への厳しい批判と同時に、歴史と国家と個人を結ぶアイデンティティ模索である。これは太平洋戦争が被害国の記憶を表象する文学という現在に生きていることを示しており、日本は加害の歴史を忘却してはならないと認識させられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のアジア系アメリカ文学には、出身国に目を向けて太平洋戦争時の日本植民統治を取り上げる傾向がみられる。それはアジアの国にも顕著な傾向であり、なぜどのようにこのテーマを取り上げるかは日本人研究者として見逃せない。本研究ではこの文学ジャンルの系譜を作成し分析した。日本が加害の歴史に鈍感だという批判は、この文学ジャンルの研究で痛感させられる。アジア系アメリカ人もアジア人も80年近く前の歴史を記憶から蘇らせ、日本の侵略統治が今なお被害国には大きなトラウマだと明瞭に示している。この研究は日本に欠けている部分を補う意義をも持つものである。

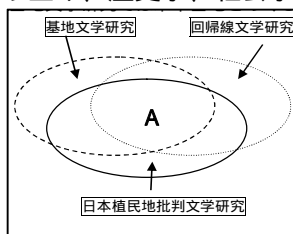
研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to analyze and discuss the representation of Japanese invasion and rule in Asian American literature from the perspective of historical memory. This also represents historical memory on the part of the victimized countries, and Asian writers were also included in the study to create a genealogy of works in this genre. Most of the works were published after 1990s, with the background of stability and the establishment of human rights in Asian countries. The common thread that runs through these works is a harsh criticism against Japanese occupation, as well as a search for an identity that links history, nation, and individual. This indicates that the Pacific War is still alive today in the form of literature that represents the memory of the victimized nations, and that Japan must not forget its history of aggression.

研究分野：アジア系アメリカ文学・文化

キーワード：アジア系アメリカ文学 日本植民統治 太平洋戦争 アジア文学 戦争記憶

1. 研究開始当初の背景

アジア系アメリカ文学において太平洋戦争中の日本統治の記憶を表象する文学が90年代以降急増している現象がみられるが、これに着目し横断的包括的に分析した研究はいまだない。だがこの現象は日本統治を体験した多くの地域が歴史の記録に乏しく、記憶の掘り起こしを大きな課題としており、それが文学に波及した結果だと考えられる。それゆえこのジャンルの文学を取り上げ、歴史学、社会学、国際政治学などから学際的に研究する意義は大きい。



一方、本研究者はこれまで左の図の三つのジャンルに関わる研究を行っており、いずれもジェンダー、オリエンタリズム、ポストコロニアリズムなどの観点からの太平洋戦争に関連した文学研究である。これらの研究ジャンルの交点 Aこそ上記した太平洋戦争記憶の研究という領域となる。ここで要請されるのは、アジア太平洋地域における日本統治の記憶を表象することの包括的な意味と意義を探ることであり、それはあらたな文学研究領域を拓くものと期待される。

2. 研究の目的

本研究の当初の目的は、アジア系アメリカ文学において太平洋戦争時の日本の侵略統治を取り上げた文学が近年急増している現象に着目し、これを収集して記憶がどのように表象されているかを分析することにあった。ここでまず認識すべきなのは、日本がアジア太平洋地域を侵略して生じた抑圧は多くのアジア人を米国に移民させ、その中から作家が生じたという事実である。これらアジア系アメリカ人作家たちの多くは戦争体験を持たない世代であり、歴史は体験ではなく記憶として想起されている。過去の記憶をたどることの意味は癒しにつながり、世代を超えた一体感をもたらすとされる。その意味で記憶の再生は世代を超えて受け継がれていると理解できる。

アジア系アメリカ人による戦争関連の文学に日本侵略が取り上げられるのは、歴史をアジアの出身国から見ることにほかならない。それは過去を記憶によって再定義する行為でもあり、アジアが安定した今こそ可能となったといえよう。とすると、この記憶の再生はアジア系アメリカ人のみならず、アジア人にとっても重要な行為なのではないか。しかもアジア人作家も同様に戦争記憶の表象をこの時期に著す傾向がみられるという事態を踏まえ、アジアの作家も研究対象とすることとした。これはまた、世界文学という新たなアジア系に関する思考にまさに合致する方向性でもある。

3. 研究の方法

研究方法は、文献調査、聞き取り調査および現地調査から成る。

(1) 文献調査

文学テキストの発掘や再読に加えて歴史学、社会学、文化人類学、国際関係学などの広範囲の調査を行った。文学作品に関しては翻訳も含めて英語での表現に限定した。

文献調査が対象としたのは以下のジャンルである。

歴史と記憶に関する文献

アジア系アメリカ文学と戦争に関する批評

日中戦争、南京大虐殺、満州などに関する中国系文学作品

慰安婦、強制徴用などに関する韓国系文学作品

慰安婦、マニラ市街戦、マカピリなどに関するフィリピン系およびフィリピン文学作品

華僑大虐殺や731部隊などに関するシンガポール系文学作品

慰安婦や言語はく奪などに関するチャモロ(グアム)系文学作品

慰安婦などに関するマレーシア文学作品

インドネシア文学作品

さらにこれらの文学の日本統治の記憶に関して次の要素を分析の基軸とした。1. 抵抗/闘争、2. 服従、3. 悲嘆、4. 同調、5. サバイバル、6. 解放。これらの要素は多くの場合複合的に組み合わせられる場合も多いが、歴史記憶の表象のあり方を示すには必要不可欠なものだといえる。この文献調査により、理論的枠組み概念を構築しテキストの分析を行った。

(2) 現地調査

また現地調査としては、アジアの現地に赴き歴史の場の検証をすることと、作家および批評家への聞き取り調査を構想した。しかしこの調査構想はコロナ禍で海外渡航が難しい状況が生じたため、当初目指した成果は上げられなかった。研究対象とした地域は、太平洋戦争中に日本が侵略統治した地域、すなわち中国、韓国、香港、フィリピン、シンガポール、マレーシア、インドネシア、グアムなどのアジア太平洋地域であり、日米両国において、調査研究を試みた。2016年度は米国ニューヨーク市とロサンゼルス市、2017年度から19年度にはロサンゼルス市に赴き、大学やエスニックタウンにおいて主に作家、研究者へのインフォーマルなインタビューを行った。この間私的な事情により希望していた東南アジアへの調査はかなわず、それもあって当初4年間の計画を延長した。ところが2000年度よりコロナ

ウィルスの感染で渡航はできずオンライン授業対応などで研究時間の削減を余儀なくされたため、さらに2年延長して機を窺ったが海外渡航が難しい状況が変わらないので、ここまでの研究で区切りをつけることとした。

4. 研究成果

アジア系アメリカの文学や歴史の枠組み概念として50年以上有効だった越境(トランスナショナルリズム)は、米国中心の世界観に基づくという批判が生じ、より有効かつ平等な概念として登場したのが環太平洋(トランスパシフィック)概念である。これは環太平洋支配をめざした日本植民統治に関する文学には極めて有効な思考として歴史と文学をコロナリズムとポストコロナリズムに関連付けた分析を可能にする。ただしこの枠組みにも米国中心という限界が残る。それを脱したのがWai Chee Dimockが提唱した世界文学の枠組みであり、文学をより大きな連続体で捉える必要性を示す。これはアジア系アメリカ文学を作家の出身国の文学と横断的に研究する可能性と意義を示唆しており、本研究を支える枠組みとなり得る。この思考の下で、当初構想した研究対象はアジア系アメリカ文学からアジア文学へと拡大したわけである。ただし英語および日本語で表現されているものという限定はある。

アジア系アメリカ文学における日本植民統治を扱った作品は、1990年代以降に急増している。この現象はアジア系移民の生活の安定による故国振り返りとアイデンティティ確認、90年代のポスト冷戦期の潮流である人権リドレス運動による人権意識の高まりによるものと分析される。これはアジアの国々の政治的経済的安定の結果、ようやく到達した地点だとも考えられる。問題とされるのは、太平洋戦争中に日本が占領統治をした地域における様々な抑圧行為であり、その表現者は中国、韓国、フィリピン、グアム、シンガポールからのアメリカへの移民作家およびマレーシア、インドネシアなどのアジア人作家である。これらの文学作品がモチーフとして取り上げるのは、埋もれた歴史の掘り起こし、暴力の連鎖、被害と加害の混在と複雑性、信頼と裏切り、などであり、それを先に挙げた分析機軸の6項目から分析を試みた。

作家の共通点として着目すべきなのは、日本の侵略統治に対する厳しい批判、実体験を持たない作家の歴史構築、歴史と国家と個人をつなぐ視点、故国への哀惜と国家および個人のアイデンティティ確立への情熱、などである。これらを基に、次のような日本侵略をテーマとするアジア系アメリカ人とアジア人の主要文学一覧を作成した。なおここに挙げた作品は対象の代表的なものであり、全作品ではないことを断っておく。

出身国・所属国	作家生没年	作品名
中国/アメリカ		
Amy Tan,	1952 ~	<i>Kitchen God's Wife</i> (1991)
Ha Jin	1956~	<i>Nanjing Requiem</i> (2011)
Wing Tek Lum	1946 ~	<i>The Nanjing Massacre</i> (2012)
韓国/アメリカ		
Theresa Hak Kyung Cha	1951 ~ 1982	<i>Dictée</i> (1982)
Chang-rae Lee	1965 ~	<i>A Gesture Life</i> (1999) <i>The Surrendered</i> (2010)
Nora Okja Keller,	1965 ~	<i>Comfort Women</i> (1997)
Therese Park	1940s?	<i>A Gift of the Emperor</i> (1997/2005)
フィリピン/アメリカ		
Jessica Hagedorn	1949 ~	<i>Dogeaters</i> (1990)
Ninotchka Rosca	1946 ~	<i>State of War</i> (1990)
Cecilia M. Brainard,	1947 ~	<i>When the Rainbow Goddess Wept</i> (1999)
Tess Uriza Holthe	1966 ~	<i>When the Elephants Dance</i> (2002)
Zamora Linmark,	1968 ~	<i>Leche</i> (2011)
Miguel Syjuco	1976 ~	<i>Ilustrado</i> (2010)
香港/中国/アメリカ		
Janice Y. K. Lee	1970s? ~	<i>The Piano Teacher</i> (2009)
シンガポール/アメリカ		
Sandi Tan	1972 ~	<i>The Black Isle</i> (2012)
グアム(チャモロ)/アメリカ		
Peres Howard	1940 ~	<i>Mariquita</i> (1986)
Tanya Taimanglo	1972 ~	<i>Attitude 13</i> (2010)
Craig S Perez	1960s or 70	<i>From UNINCORPORATED TERRITORY</i> (2008)
マレーシア		
Tan Twan Eng	1972~	<i>The Gift of Rain</i> (2007)
インドネシア		
Ishmael Marahimin	1934~2008	<i>And the War Is Over</i> (1987)

上記作品のほとんどは90年代以降の作品であり、次のような新機軸が顕著である。

日本侵略に対してストレートな告発でなく読者に判断をゆだねる

日本侵略をほかの植民侵略と並置して断片的に語ることで、読者に歴史の再構築を要請する日本統治からの解放は個人の解放につながりうるが、それほど単純な解決とはなり得ず、喪失や悲嘆などの複雑な結果を伴う。

またアジア系アメリカ人作家とアジア人作家の相違点としては、アジア系が米国の関与を含めているのに対し、アジア人は米国や連合国への言及が少ないか全くないという傾向が見出せた。この相違点は世界文学という概念から考えると、ポストコロニアリズム視点を示しているとも考えられる。

さらに、多くの作家に共通する問題意識が戦争とジェンダー抑圧の問題である。この視点からの分析により、上記の文学群は四つの系譜に分類できる。すなわち A. 女性抑圧をストレートに告発する系譜、B. 女性抑圧を個人や国家の問題と絡めて告発する系譜、C. 抑圧される女性による抵抗を示す系譜、D. 抑圧を逆手に取ったサバイバルをテーマとする系譜、である。いずれも女性の性的な搾取が絡むが、それをこのような多様な形態で表現することは戦争の多角的なジェンダー解釈を示してもいる。

本研究の最終的な成果としては以下の4点を挙げる事ができる。

1. 太平洋戦争の被害側の記憶を記す文学の系譜を見出し位置付けたこと
 2. 戦争は記憶の中、文学の中に今なお生き続けていることを検証したこと
 3. 日本人はこうした文学からも被害側の厳しい視線を真摯に受け止めるべきと提言したこと
- 今後も戦争と記録、記憶とその表現に関する研究は重要かつ有効であるという思考の元に、研究をより深めて推進したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 河原崎やす子	4. 巻 第60集
2. 論文標題 インドネシアにおける日本占領統治の記憶 - Ishmael MarahiminのAnd the War Is Over解読	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 河原崎やす子	4. 巻 第59集
2. 論文標題 マラヤ における日本占領の記憶 Tan Twan Engが描く戦争と人間の絆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 河原崎やす子	4. 巻 第58集
2. 論文標題 中国系アメリカ文学にみる南京事件－；歴史をめぐる記憶の表象を読み解く	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 河原崎やす子	4. 巻 第57集
2. 論文標題 写真結婚とジェンダー問題－The Buddha in the Atticにおけるコレクティブな声の意味	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 33,44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河原崎やす子	4. 巻 第56集
2. 論文標題 日本の植民統治の記憶 近年のアジア系アメリカ文学に見る傾向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 13,23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河原崎やす子	4. 巻 第61集
2. 論文標題 戦争花嫁ステレオタイプの変遷ー戦争とジェンダー抑圧	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 河原崎やす子
2. 発表標題 アジア系アメリカ文学研究の潮流ー個人的関心の推移を含めて
3. 学会等名 青山学院大学経済研究所2021年短期プロジェクト「多人種・多民族社会(米国)とジェンダー」ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岐阜聖徳学園大学外国語学部	4. 発行年 2018年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 256
3. 書名 リベラル・アーツの挑戦	

1. 著者名 岐阜聖徳学園大学外国語学部	4. 発行年 2022年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 311
3. 書名 アカデミック・ダイバーシティの創造	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------